

## 〈また、いつか、あえる〉

waltz 2015 映像インスタレーション  
2015年11月12日-11月15日 18:00-21:00  
中川運河・長良橋北側

秋庭 史典

### 1 インタラクショナル

それは「インタラクトする風景」<sup>1</sup>そのものだった。フロート<sup>2</sup>を構成する2枚のスクリーンに現れる映像同士のインタラクション。スクリーンの映像と水面に映るその分身、同じく水面に投げかけられたビルのネオンサイン。河岸に並ぶ倉庫の傍らに停まるクルマの赤いテールランプ。そして、それらのはるか向こう、森のかなたに借景として聳える高層ビル群のあかり。それぞれが放ち／映し／映される光の競演だけでも、わたしの目を釘付けにするには十分だった。

もちろん、インタラクションは光のそれにとどまらない。スクリーンに映し出される映像は、産業遺産としての中川運河の記憶<sup>3</sup>ともインタラクトする。さらに、今も生きる運河をめぐる営み、たとえば、河岸に停車された7台の大型トラックが空に掲げる巨大な荷台とも。そして、フロートが風に煽られて旋回舞踏するのを見るとき、それが気象・自然とインタラクトしているのも明らかだ……。こうした多種多様、多層的なインタラクトについては、いったん置いておこう。この作品を長く見守ってきた方々にとって、もはや自明のことだろうから<sup>4</sup>。

### 2 作品を可能にしているもの

#### — wald(ヴァルト)を迂回する

Q: この作品(waltz 2015)を可能にしているものは何か A: フロートの設計<sup>5</sup>。もちろんそのとおり。しかしここでは、別の視点、すなわち、制作の中心である伏木啓と井垣理史(共に名古屋学芸大学)が関わった他の作品と比較することで、この問いに答えてみたい。その作品とは、2015年8月に上演された「wald」。同じ中川運河沿いに建つリンナイ株式会社旧部品センターを舞台に行われた、映像サウンド・パフォーマンス／インスタレーションである。

長くなるが、その特徴を記しておきたい。

彼らは、〈それは、かつて、そこに、あった〉を、今あらためて生み出し、ふたたび消滅させることで永遠化し救い出す。この〈かつてそこにあった〉を生み出すために用いられるのが、なんらかの周期的運動である。「wald」でのそれは、かつてこの部品センターで行われていた、「歩きながら部品を運搬する」<sup>6</sup>巡回運動であった。この運動が反復されるうち、運搬に最適化されたセンター内の導線とそこでの作業が目前に甦り始める。この運動が、振り子のように見る者を引き込むからである。反復が周期を生み出し、鑑賞者は無意識に共振する。共振した鑑賞者は、自らの身体的記憶のなかから、その周期と同種の運動を呼び出し、それにより、かつてセンターのなかにあったであろう光景を、まるで自分自身もそこにいたかのように、しかしこのとき初めて、生成しているのである。

この巡回運動のただなかで、「それから」という声が発せられる。しかもこの「それから」は、聴覚的にだけではなく、同じくセンター内でもかつて行われていた「パーツを組み合わせる」<sup>7</sup>作業のように、型抜きされた活字(「そ」「れ」「か」「ら」)を選び・組み合わせ・組み合わせられた活字内に白い粒子を詰め込み・そののち活字を取り去ることで白い粒子から成る「それから」の文字だけを残す、という一連の所作のなかで、視触覚的にも生成される。この複合感覚運動もまた繰り返され、見る者をもうひとつの周期に引き込む。「それから」の語が強峻する過去の線の先後関係を宙づりにしたまま続く巡回運動がもたらす、不思議な周期に<sup>8</sup>。

共振が複数生じること、しかもこの複数の共振は、一人の人間がセンター内に設計された同一の導線上で行う複数の連続する所作から澁みなく生成されること。加えてこの澁みない所作を行う演者が複数名いること、しかも彼らが同期をとりながら同じ導線上を移動するにもかかわらず、各人の所作の微妙な違いによりずれが生み出されて

いくこと。これらにより作品は単調さを免れ、自然に似たものになる。

傍らに、運河を取り巻く種々の自然を映す巨大なスクリーンが屹立している。この映像は、水平方向の運動が中心の上演中であって、垂直方向の巨大さゆえにむしろ気配と化しているが、この映像と身体運動が結びつくとき、人はセンター内で行われていた作業そのものを離れ、森と水・そして旋回する人たちからなる世界に没入する。「それから」いったい何があったのか、明かされることのないその結末の告白を、今か今かと待ちながら……。

他方、この世界を消滅させる要因も、一連の作業のなかに組み込まれている。生成された文字「それから」は、導線上を運ばれたのち水<sup>9</sup>に流され、やがて溶けてゆく。また、この生成の始めからそこに居て、しかし導線に囚われることなく動くもうひとつの身体(山田珠実)は、ときに導線と交錯しながら、たえずこの作品を異化し、生成のただなかに消滅と再生をもたらし続けていた。

このような、共振に基づく生成消滅の運動を幾重にも巧みに仕掛けることにより、作品「wald」は成立していたのである<sup>10</sup>。

### 3 再び「waltz 2015」へ

「waltz 2015」はどうだろう。両者には共通点がある。「waltz 2015」もまた、同期とずれをその本質に持っているからだ。各フロートのメディアプレイヤーは、LANケーブルによって他のフロートのそれに接続されている。おかげで各フロートの映像は、他のすべてのフロートの映像と同期することができる。メディアプレイヤーの側から言えば、それは、プロジェクターに映像を送りながら同時に他のそれと同期をとっていることになる<sup>11</sup>。自らに与えられた所作を遂行しつつ他との同期をはかるそれは、「wald」における複数の歩行者の頭脳に対応する。しかし頭脳としてのメディアプレイヤーは、歩行者と違い、自らの身体をコントロールしているのではない。身体のコントロールは、運河的自然というあまりに複雑なため見渡すことのできない、もうひとつの周期の仕事だ。それにより、個々のフロート―舞踏するペアの身体―は旋回させられ、その位置と角度をずらされながら、作品全体の配置を更新してゆくことになるのである。

撮影：稲垣拓也



さらなる違いがある。「waltz 2015」では、われわれもまた、河岸と橋を往復する周期的運動を行う。その途中、フロートに向けたわれわれの視線は必ず一度倉庫によって遮断されるのだが、その前後で生じるスケールチェンジは、本作だけのものだ。河岸で見ていたのが樹木の額縁で枠取られた新しい動く絵画(影像と鏡像は絵画の二起源である<sup>12</sup>)なら、遮断後橋上で出遭うのは、過去から現在までの時空間イベントの集積である中川運河を中央に置き、新しい三遠の手法で展開された21世紀の山水図、初めて知る名古屋の圧倒的な立ち姿である。そこで気づくのは、「wald」での水平軸<sup>13</sup>に対する、本作での垂直軸の重要性である。運河に点在し、空と水底の両極へ延びるフロートの垂直性が、近くのネオンサイン、また遠くの高層ビル群において反復され、その光景をひとつづきのものと感じることを可能にしている。

そして、この垂直軸をかたちづくる映像と鏡像について考えることは、本作品、さらには彼らの一連の活動の核にある重要な事柄を明らかにする。一般に映像や鏡像は、ホストとなる物や現象がなければ存在しえない「物もどき」<sup>14</sup>と考えられている。間違いではない。しかし、儚いとまで思う人がいたら、その人は映像や鏡像を、特定の時間と場所でしか会えない何かと考えている。けれどもし両者の関係を、「ホスト」と「物もどき」からではなく、「ソース」と「アルゴリズム」の観点から見れば、どうだろう。「ソース」とは、「アルゴリズムとともにあり状態遷移を繰り返す不定形なもの」、<sup>15</sup>「アルゴリズム」とは、その遷移を現象させる「一定の手順」のことで、一方は他方を欠いてはありえない<sup>15</sup>。そしてこのソースは、アルゴリズムさえあれば、どこにでも一ただし遷移を繰り返すためにまったく同じものとしてではないが一現れることができる。もしそうなら、わたしたちは、またいつか、彼らのつくりだす手順を通じてこのソースに出逢えるのではないか。それは気象に似ている。条件さえ整えば、われわれは、またいつか別の場所で、かつてと同じようにその風に出逢えるかもしれないのだから。

「記憶のサイコロラマ」<sup>16</sup>と呼ばれた作品「cycling」から10年。その後わたしは、さまざまな場所でその風に出逢うことができた。ひとつとして同じではないけれども、何か持続するものを感じながら。作品という単位を越えた(また、いつか、あえる)―この感覚が、本作品そして彼らの活動を可能にし、際立たせているものなのではないか。わたしにはそう思われるのである。

1 | 『JunCture 超域的日本文化研究』第4号(笠原書院、2013)のテーマ。編集者の一人、茂登山清文により提起されたコンセプト。

2 | 水面に浮かぶ構造体の全体のこと。2つのスクリーンのほかに、プロジェクターとメディアプレイヤーから成る。伏木啓氏のご教示による。

3 | 竹中克行(2010)「生態社会環境としての都市の水辺空間―名古屋・中川運河の再生に向けて」pp.1-20  
<http://www.for.aichi-pu.ac.jp/~takenaka/Cuaderno/Articulo/CanalNakagawa01.pdf> [2015/12/14]

4 | わたしは初でした。

5 | この作品に関わったすべての方々も。

6 | 「waldヴァルト」チラシより引用。

7 | 同上。

8 | この共振は、部品センターの「それから」をも想起させる。

9 | 実際の水。象徴的意味を持ち、演者もさまざまな仕方ですれ、水を交換する。

10 | 音響が、目立たぬ仕方ではあるが、この複雑さを支えていたことも忘れるべきではない。また、ほんとうに難しいのは、この周回運動をどう終わらせるかの方である。

11 | 同じく伏木啓氏のご教示による。

12 | 金井直(2004)「画家／ナルキッソスの波紋」『イメージの水位』豊田市美術館、pp.9-15

13 | ゆえに2階から1階への、垂直方向の水の受け渡しが印象的であった。

14 | 加地大介(2014)「虹と鏡像の存在論」松田毅ほか『部分と全体の哲学』春秋社、pp.197-228

15 | 水野勝仁(2014)「オリジナルからアルゴリズムとともにある「ソース」へ」『名古屋芸術大学研究紀要』第35巻、pp.355-368 両者の関係を受肉と取り違えないように。

16 | 茂登山清文(2006)「記憶のサイコロラマ」『intermedia performance cycling』

【展覧会データ】

タイトル:waltz 2015 映像インスタレーション

日時:2015年11月12日[木]ー11月15日[日] 18:00-21:00

会場:中川運河・長良橋北側

総合演出・映像:伏木 啓

空間設計・施行:井垣 理史

企画・運営:木田 歩

運営補助:稲垣 拓也

ケータリング:パピリカ、ホジャ・ナスレディン / quotidien / 空色曲玉 / quotidien

記録:村上將城・稲垣拓也